

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between interpregnancy interval and risk of preterm birth and its modification by folate intake: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠間隔と早産との関連について

ユニットセンター(UC)等名: 大阪 UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Epidemiology

年: 2021

DOI: 10.2188/jea.JE20210031

筆頭著者名: 谷川果菜美

所属 UC 名: 大阪 UC

目的:

妊娠間隔とは、子どもの出生から次の受胎までの期間を指す。本研究では、妊娠間隔と早産との関連及び食事やサプリメントからの葉酸摂取による関連の修飾効果について明らかにすることを目的とする。

方法:

エコチル調査に登録された 103,062 妊娠のうち、単胎生産児 52,234 人を対象とし、妊娠間隔と早産との関連について検討した。兄弟の生年月、エコチル調査対象児の生年月及び在胎週数を用い、妊娠間隔を算出した。ロジスティック回帰分析を行い、出産時の母親の年齢及び共変量を調整した上で、妊娠間隔による早産のオッズ比及び 95%信頼区間を算出した。

結果:

妊娠間隔 18-23 か月と比較して、6 か月未満と 120 か月以上の妊娠間隔において、早産が多かった。妊娠間隔と早産との関連に対する葉酸摂取の修飾作用は統計的に有意ではなかったが、6 か月未満と 120 か月以上の妊娠間隔における早産リスクが、妊婦の不十分な葉酸摂取の群("食事摂取 400 μ g/日未満"かつ"毎日の葉酸サプリメント摂取なし")で高かった。

考察(研究の限界を含める):

17 万人を対象とした研究及び 43 万人を対象とした研究(いずれも米国)において、5 か月以下及び 120 か月以上の妊娠間隔での早産リスクが高いことが報告されており、本研究での所見と一致した。本研究の強みは、大規模出生コホート調査のデータを用い、妊娠間隔を細部に渡って区分し、なおかつ多くの交絡因子を考慮して、早産との関連について検討した点である。

結論:

妊娠間隔 18-23 か月と比較し、6 か月未満と 120 か月以上の妊娠間隔において、早産が多いことが明らかになった。また、6 か月未満と 120 か月以上の妊娠間隔における早産リスクが、妊婦の不十分な葉酸摂取の群("食事摂取 400 μ g/日未満"かつ"毎日の葉酸サプリメント摂取なし")で高かった。